

史料にみる 歴史

## 越後屋の店内

(株)三越 所蔵

江戸時代の商人たちは、海外への渡航が禁止されていたので、商人としての活動は国内に限定されていた。それでも、人口が集中した江戸や「天下の台所」といわれた大坂を中心に商業は発達し、「近世の三大豪商」といわれた三井・住友・鴻池をはじめ、加賀の銭屋五兵衛・箱館の高田屋嘉兵衛など、地方を代表する商人もあらわれている。

ここでは、三大豪商の一つ三井について詳しくみておきたい。この絵は三井が経営する江戸駿河町（現在の東京都中央区日本橋室町）の越後屋呉服店の店内の様子を描いたものである。

店の中央に「おちごや本店」とみえる①。これは、この店が越後屋の本店であることを示している。越後屋はこの駿河町の本店のほか、大坂・京都にも店をもっていて、江戸・大坂で呉服商を営み、江戸・京都・大坂では両替商も営んでいた。

絵の左側部分②で店員が客に呉服を示しており、別の店員が呉服を運んでいるところも描かれていて③、越後屋本店は呉服屋だったことがわかる。

ちなみに、越後屋という屋号から、三井家が越後（現在の新潟県）の出身と思っている人が多いようであるが、伊勢の松坂（現在の三重県松阪市）の出身であった。ルーツをたどると、もともとは近江（現在の滋賀県）の武士で、戦国大名六

角氏の家臣だった三井越後守高安<sup>たかやす</sup>が近江から伊勢に移住し、高安の子高俊のときに質屋と酒屋を営み、まわりから「越後殿の酒屋」といわれるようになり、それがそのまま屋号になっている。

この高俊の子が三井家の創立者となった高利で、はじめ高利は、兄俊次がはじめた江戸の店を手伝っていたが、高利があまりに商才を発揮したため、俊次は「店を弟に乘っ取られるのではないかと警戒し、一時、伊勢の松坂に帰されるほどであった。

高利は松坂で金融業を営み、それによって資金を貯め、江戸へ出る機会をうかがっていた。1673年（延宝元）、兄俊次が死んだのを機に、京都に呉服仕入店を開き、同年、江戸に呉服店を開店し、屋号を越後屋とした。三井の三を井が囲む商標も用いられている。店内にものれんなどにそのマークがみられる④。

その後、1683年（天和3）からは両替店も開設し、事業は順調に発展していった。1691年（元禄4）、幕府御金蔵銀御為替御用を引き受けたことがきっかけとなり、大坂に両替店と呉服店を開いている。越後屋がこのように短期間に急成長をとげることができた秘密がこの絵の中に隠されていた。それが、店内に貼り出されている「定」⑤にみえる「現金かけねなし」の七文字である。

この店内には貼紙でそのことが示されているが、残されている看板には、

現銀 駿河町  
呉服物品々  
無掛直 越後屋

とある。この場合も「現銀掛値無し」と読む。掛直は掛値に同じである。

この「現金かけねなし」という売り方は、当時としては画期的な商法であった。というのは、そのころは掛売といって、信用ある買手に対し売る側が即金ではなく、一定の期日に代金を受け取る約束で品物売るのがあたりまえだったからである。「節季払い」などといって、年4回、場合によっては盆と暮の2回、まとめて集金というのがふつうだった。

当然、売る側は、その間の利子分にあたる額を上乗せして売ることになる。越後屋は店頭での現金安売りという、現在の売買に近い形でお客をつかむことに成功したのである。

ただ、そうした新商売は、同業者からは非難され、実際、いろいろと妨害も受けている。しかし、この薄利多売の新商法は一般顧客に評判となり、呉服商として不動の地位をかちとることとなった。

なお、画面をみて、いまの商店とのちがいに気づいてほしい。商品を店頭と並べてはいない。

（静岡大学名誉教授 小和田哲男）